

美		胃	え	を	膝		し	見	て	奥	ソ	に	越	詳	昨	や			不
祿	「	に	る	を	の	「	て	え	し	占	フ	響	し	しい	日	っ			思
に	番	流	く	巻	上	あ	ま	な	ま	が	ア	く	の	い	あ	た			議
は	才	し	ら	いた	で	ぐ	っ	い	あ	い	に	。	溜	説	の	わ			な
見	と	込	い	た	自	あ	た	は	ぐ	な	座	今	ま	明	後	け			真
え	雫	み	の	を	分	ぐ	。	ず	あ	い	っ	朝	つ	をし	、				相
な	に	静	一	舐	の	。あ		の	ぐ	こ	て	改	た	な	何				
か	見	かに	瞬	め	顔	ぐ		虚	。	と	い	め	何	な	か				
っ	聞	口	の	て	と	。		空	と	隣	る	て	か	か	を				
た	き	を	沈	い	同	隣		に	。	に	。	し	含	確					
。	で	開	黙	る	じ	座		視	。	座	。	て	んだ	認					
そ	、	いた	の	る	く	る		線	。	名	。	カ	仏	し					
し	あ	。	後	る	ら	取		を	。	取	ウ	蘭	な	な					
て	ん		、	猓	い	の		さ	。	の	ン	の	け	ら					
な	た		女	々	の	大		ま	。	。	タ	声	ば	ら					
異	や		将	の	食	き		よ	。	。	ー	が	な	ん					
常	紅		が	事	事	さ		わ	。	。	横	宿	ら	と					
な	蘭		お	音	の	の		せ	。	。	の	屋	ら	と					
ま			茶	が	渦	渦		た			。								
			を	こ				り											

での容姿・いや、「美への執着」。まず間
 違いないだろうね。」
 女将のあっさりとした真相の告白に、名取と
 猿々を除く全員の視線が交差する。
 「その、美醜怒という方は、こちらに宿泊
 されている宿泊者なのですか？」
 美祿がそう女将に尋ねる。美祿の生きている
 世界では人間と妖怪が共存しているからか、
 こうした得体の知れない存在に対する抗体が
 まだあるのかもしれない。
 「ああそうさ。本来なら降りてくるはずの
 ない存在だよ。」
 その女将の一言で一気にその場に緊張が走っ
 た。昨日この場で同じように女将の口から聞
 いた言葉が頭の中で再生される。
 『四階五階、さらにその上へと階を重ねる毎
 に、あんた達では干渉もままならないほどの
 物たちが宿泊している。神に近い存在。神。
 それ以上の物もここにはいる。』
 再び漠々の規則的な「あぐあぐ」という声が

聞こえる時間が流れた。「ねえ、それってお
 いしいの♪？」「食べちゃダメ。」という和や
 かな会話が、場違いに雰囲気を侵食していく
 。（何から尋ねるべきなのだろうか・・。）
 聞きたいことは次から次へと浮かんできては
 いるが、何を皮切りにその疑問を埋めていけ
 ばいいのかわからない。仏蘭ですら両腕を組
 み机の模様を眺めるように黙りこくっている
 美祿も雷鼠も紅蘭も、そして名取さえも口を
 開かない。それぞれ表情を確認し終わって
 しまった番才は、なぜか無性に渴いてしまっ
 た喉を潤すためにお茶を口に含んだ。
 「もう随分と昔の話になる。美醜怒はある
 日突然ここにやって来た。ここに来た理由も
 そして何者かさえもわからないそやつは、あ
 んた達が知ることすらない遠い遠い世界から
 やって来たのだと、その人は教えてくれた。」
 子供たちに昔話を聴かせるような心地良い抑
 揚のついた女将の話に誰もが耳を傾ける。そ
 れぞれが聴く体勢を作り終えたのを待ってい

たのか、女将が静かに続きを話し始めた。

「美醜怒という名前はわたしが名付けた。

その世界では違う名前を複数持っていたそう

な。そして、その世界の人々から“神”とし

て崇められ、いくつもの不思議な力を宿すと

ても高貴な存在なのだということがわかった

時が止まったような沈黙が続く。

「あの方はどんな神様だったのでしょうか？

なぜこの宿屋にいらしたのですか？」とわた

しは尋ねた。するとその人は“美を司る神様

だよ”と教えてくださった。

全員が一斉に空気を吸ったからか、風が少し

揺らめいた。

「その世界に、美醜怒はあんだ達も持って

いる“美意識”という感覚を授けなすった。

だが、あんだ達でも理解できるように、美意

識という感覚はとても曖昧で複雑な感覚なん

だよ。いつしか美醜怒はわからなくなったん

だとその人は言っておられた。“本当に美し

いものとはなんなのか”“誰もが求める美し

い	「	そ	つ	、	そ	う	よ	！	ま	ず	は	そ	の	謎	を	教	え	な	さ		め	た	。	に	増	し	、	番	才	は	交	わ	し	て	い	た	掌	を	硬	く	握	り	し		雷	鼠	が	そ	う	尋	ね	る	。	自	分	の	不	甲	斐	な	さ	は	さ	ら		や	ん	と	か	に	は	見	え	な	か	つ	た	の	？	「		え	た	り	し	た	の	に	、	仏	蘭	姉	ち	ゃ	ん	と	か	美	祿	姉	ち		し	て	番	才	さ	ん	や	雫	姉	ち	ゃ	ん	に	は	見	え	た	り	聞	こ		「	ね	え	ね	え	、	そ	の	美	醜	怒	つ	て	神	様	は	さ	、	ど	う		が	精	一	杯	だ	つ	た	。		将	の	付	け	た	名	前	か	ら	そ	ん	な	こ	と	を	想	像	す	る	の		い	も	の	が	嫌	い	で	怒	つ	た	り	す	る	の	だ	ら	う	か	。	女		思	考	も	心	も	追	い	つ	か	な	い	。	美	を	司	る	神	は	、	醜		に	話	が	壮	大	で	、	膨	れ	上	が	つ	た	事	実	に	ま	つ	た	く		名	も	わ	か	ら	ぬ	神	様	の	話	。	想	像	し	て	い	た	以	上		見	届	け	、	誰	も	が	今	の	話	を	頭	の	中	で	反	芻	さ	せ	る		文	章	の	句	読	点	の	よ	う	に	お	茶	を	飲	む	女	将	の	姿	を		の	答	え	を	求	め	探	し	続	け	て	い	る	。」		は	思	考	の	渦	か	ら	抜	け	出	せ	な	く	な	り	、	今	で	も	そ		さ	に	正	解	は	あ	る	の	だ	ら	う	か	”	こ	う	し	て	美	醜	怒	
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--

女	将	の	そ	の	言	葉	に	は	た	だ	の	一	欠	片	も	嫌	味	や	負
た	い	だ	よ	。															
番	才	、	ど	う	や	ら	あ	ん	た	に	は	魅	力	が	足	り	な	い	み
「	あ	ー	は	っ	は	っ	は	っ	！	そ	う	か	も	し	れ	な	い	ね	え
	「	・	・	・	魅	力	か	し	ら	？	」								
め	た	。																	
つ	め	、	そ	の	後	番	才	の	顔	を	睨	み	つ	け	る	よ	う	に	眺
仏	蘭	は	中	央	に	あ	る	机	の	上	か	ら	紅	蘭	と	美	禄	を	見
「	見	え	な	か	っ	た	物	に	“	あ	る	”	こ	と	・	・	・	？	」
と	を	考	え	れ	ば	い	い	。											
え	て	る	物	に	な	く	て	、	見	え	な	か	っ	た	物	に	あ	る	こ
「	ひ	っ	ひ	っ	ひ	っ	。	な	ー	に	簡	単	な	こ	と	さ	ね	。	見
や	し	な	い	わ	。														
わ	せ	の	時	間	で	し	よ	！	？	回	り	く	ど	い	っ	た	ら	あ	り
よ	！	も	う	ク	イ	ズ	は	た	く	さ	ん	！	今	は	も	う	答	え	合
て	言	っ	て	る	の	よ	！	ち	よ	っ	と	あ	ん	た	性	格	悪	い	わ
「	だ	か	ら	そ	れ	が	わ	か	ら	な	い	か	ら	教	え	な	さ	い	っ
将	が	全	員	に	そ	う	言	葉	を	投	げ	る	。						
慌	て	た	よ	う	な	仏	蘭	の	そ	の	言	葉	も	受	け	止	め	た	女
「	ひ	っ	ひ	っ	ひ	っ	。	ど	う	し	て	だ	と	思	う	ね	？	」	

の感情を沸き起こすような響きを感じない。
 番才は周囲から向けられる視線をやり過ぎし
 片頬だけ引きつったように上げながら何度も
 首を前後に動かす。視界の端で隣に座る名取
 の膝の上の猥々と目が合い、口元だけ笑顔を
 作り目で「どうも」と言葉を交わす。「あぐ
 あぐ。」と飴を口に押し付けながら、猥々はや
 がてゆっくりと視線を外した。
 「だが、それほどかけ離れた回答じゃない
 よ。つまりはそういうことさね。」
 「なに？見えなかったわたし達には魅力があ
 った、雫や番才にはなかったってこと？番才
 はともかく雫は十分魅力的じゃない。なのに
 なんで雫には見えて、さらにあんな風になっ
 ているわけ？」
 先ほどまでの張り詰めた空気は、またこれま
 でのような安心感すら感じられる穏やかなも
 のに変わっていた。「魅力か・・・」と心の
 中で自分に投げかけた言葉は思っていた以上
 にすんなりと溶け込んでいき、番才はすぐに

唐突に矛先を向けられた紅蘭はわかりやすく	「えっ！？あっ・・・その・・・」	「紅蘭はどうだい？」	「そりゃあ完璧な造形・・・美を誇ってるわね。」	「仏蘭や、あなたは自分の姿形をどう思うし戸惑ってしまおう。」	が見えない海底へ沈んでいくような感覚に少	けではないのだなと、女将の質問がさらに底	が司る“美”という概念が、どうやら容姿だ	ような答えは存在しない。美醜怒という神様	今問い掛けていることに、誰もが納得できる	仏蘭はその先の言葉を紡げなかった。女将が	「それは・・・」	言えるかい？」	れば、それは果たしてその物にとって魅力と	ね、それをその本人が魅力だと思っていなけ	んたにしかない魅力を持っているさ。ただど	「確かに雫、そして番才。あんたも十分あ	仏蘭の感じた違和感に同意することができた。
----------------------	------------------	------------	-------------------------	--------------------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------	---------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------

神様と密接な繋がりがあ	が、元々妖怪という存在	「美禄は妖怪としての血	はどう捉えているのだら	才から見れば美しく映る	美禄は着物の袖で口元を	とは考えられませんか。	むしろわたしなんて、そ	です。容姿やそういうた	きるか。それがわたしに	を呪うことなく与えられ	まれ持ったもので何を成	いうものを捉えられてい	「わたしは・・・みなさ	「それじゃ美禄。あなた	なかつた。	言つて「そうは思ってい	と返すことが出来るはず	るがなにも答ええない。	動揺し、肩や口をすぼめ
るんだよ。言つてみ	の	を受け継いでいる	うか。	のだが、それを彼女	。その所作は番		んなおこがましいこ	面でのお話でしたら	とつての美。美しさ	た使命をまっとうで	か、自分の運命	ない気がします。生	はどうだい？」			ない」とも答えられ	もなく、しかしかと	。「仏蘭のように「そうだ	忙しない仕草を見せ

し	「	く	「	の	女		思	見	い	名	る		そ	視	仏	ら	か	に	
た	ブ	大	あ	顔	将	「	え	つ	く	取	し		の	線	蘭	抜	、	につ	
。	ワ	き	ん	を	は	ひ	る	け	。	の	か		言	を	は	け	そ	つけ	
ど	ッ	く	た	見	ま	っ	声	出	膨	声	な		葉	向	さ	出	し	込	
こ	ー	動	達	つ	た	っ	だ	し	大	は	な		を	け	ら	し	ま	れ	
か	と	き	が	め	こ	っ	っ	た	な	な	ぜ		継	る	な	た	た	零	
ら	強	出	こ	。	こ	っ	。	よ	情	だ	だ		い	が	る	の	を	ど	
か	い	そ	こ		に	っ		う	報	か	か		だ	、	説	か	う	し	
木	風	う	に		来	っ		な	の	自	考		。	これ	明	と	た	ら	
が	が	し	た		た	っ		、	中	然	え			ま	を	か	元	に	
軋	顔	て	こ		こ	っ		と	か	と	す			で	ど	ね	戻	せ	
む	を	い	と		こ	っ		と	ら	胸	か			黙	う	。	せ	る	
よ	撫	る	こ		こ	っ		も	か	の	？			っ	。		の		
う	で	の	こ		こ	っ		気	っ	奥	」			て					
な	て	さ	こ		こ	っ		持	た	に				い					
音	い	。	に		こ	っ		ち	答	浸				た					
が	っ		い		こ	っ		が	え	透				名					
聞	た		る		こ	っ		良	を	し				取					
こ	気		の		こ	っ		い		て				が					
え	が		さ		こ	っ		と						な					

